

3. パソコンによる核医学検査報告書の標準化 WG 報告

仙 田 宏 平

(藤田保健衛生大学衛生学部診療放射線技術学科)

目的：最近の核医学画像検査は、使用放射性医薬品、検出装置、検査術式などが多様で、報告書への記述項目が増加し、読図所見が複雑多彩になっている。

そこで読図診断の作業効率および精度の向上を前提として、パソコンを利用して作成する核医学検査報告書の標準化について検討した。

方法：WG 6 施設での報告書作成の現況を調べたところ、核医学を含めた画像診断の検査報告書作成に用いているパソコンの OS は、Windows-OS と Mac-OS がほぼ半々であった。そこで今回は両者に互換性のあるソフトを用いた場合の高い汎用性を考慮し、データベースとしてファイルメーカ Pro (Claris) を、画像処理ソフトとしてフォトショップ (Adobe) を主に利用した。その他 OS のパソコンとデータベースおよび画像処理ソフトも使用した。

結果：読図所見以外の多数の項目を的確に入力する手段として、患者名など個人情報は施設のホストコンピュータから、放射性医薬品など検査に関する項目は診療放射線技師の手で行うことが有用であった。

所見入力、手入力での作業量および間違いを減らすうに、読図に必要な基本事項および専門用語によって作成した定型文を利用する方法が有用であった。ファイルメーカでは、ポップアップリストやポータルによるリレーション機能により、マウスでフィールドをクリックするだけで必要事項が自動入力され、また特定の定型文を画面

に表示できた。

読図に際して参照すべき検査目的や臨床情報などを報告書作成ファイルへ入力する作業は、量的に大きく、ファイルメーカでは定型的に行うことが難しかった。しかし、文字データは「タブ区切りテキスト」ファイルなどでフィールド別に書き出せるため、他のリレーショナル・データベースを利用して目的別のファイリングや検索ができた。守秘義務のあるデータは、別ファイルで入力・保管し、必要に応じてパスワードで開くことが有効であった。

報告書への参照画像の貼り付けは容易であったが、この操作によってデータベースのサイズが非常に大きくなるため、画像データの取り込み方法、そのファイル形式など種々の解決すべき問題点があった。

考察および結語：パソコンを用いた検査報告書作成システムは、Windows-OS と Mac-OS の両者に互換性のあるデータベースの利用により、汎用性を高め、作業量を減少できる。解決可能な入力の不慣れによる作業効率の低下と比べて、活字で明確に表示された報告書の情報効果がより勝った。守秘など問題は施設の「電子カルテ」システムと関連して検討すべきで、画像データの運用は他の画像診断部門とのネットワーク上で行うべきである。今後は他の画像診断部門と共通の報告書作成システムの構築が望まれる。